

PGA シニアツアー／第49回日本プロゴルフシニア選手権大会 笠間東洋カップ

☆ 加瀬秀樹 シニア初V (2位に4打差) ☆

シニアルーキーの加瀬秀樹(50)がノーボギーの3アンダー、69で回り、通算13アンダー、275で前日の首位を守り切りシニア6試合目で初優勝した。

今季シニアツアーは、7戦が終わって真板潔、高見和宏に続いて3人目のシニアルーキーV。これで7戦中、6試合でシニアツアー初優勝者が誕生した。加瀬の優勝は、レギュラーツアー時代2004年のサントリーオープン以来6年ぶり。4打差の9アンダーには前日首位タイの倉本昌弘(55)と尾崎健夫(56)、水巻善典(52)、フランキー・ミノザ(50)の4人が2位タイ。中嶋常幸(55)は15位タイ。

いつ勝ってもおかしくないといわれながら、ここまでの5試合、優勝争いにも絡まずもの足りなさを残していた加瀬が、突然の爆発だった。

予選ラウンドは台風がらみの風雨に見舞われ、連日サスペンデッド。決勝ラウンドは天気が回復したが、その4日間を通じてアンダーパーを通し、3日目は2イーグルを含むベストスコアの65で初優勝への原動力とした。

549ヤードの18番。セカンドショットは、左曲がり林を越えて見事にグリーンをとらえた。ピンまで10mはあったが、見事にバーディーフィニッシュ。3打差に7人がひしめいていた最終日の大混戦を、ノーボギーの横綱相撲で逃げ切った。

「今週はツキもあった。思いもよらなかった長いパットが入ったりね。最終日は、どんな雰囲気になるかと楽しみでもあったけど、水巻さん、マッシー(倉本昌弘)と一緒にリラックスしてやれた。ゲームとしては真剣だけど、その中で和むところもあっていいゴルフができた。これは新しい発見でもあるし、忘れていたものだったのかもしれない」

加瀬はシニアの初優勝で大きなものを得たといった。この夏以来、取り組んでいる低く抑えた弾道のショットも試合を追って身につけてきた。もともとドローヒッターの加瀬が、全英シニアオープンに出場して見たワトソンやランガーのショットからヒントを得た。「ドローで大きな球ばかりでなく、ストレートかややフェードする球。アッパーよりダウンプローを意識したスイングに変えている」という。この試合でも確実性の増したショットでその変身を見せつけた。

「ロフト60度のサンドウェッジを58度に変えたのもよかった。90ヤードから100ヤードの距離が楽に正確に打てた。今週はサンドウェッジの活躍も大きかったね」と、すべてにうまくいった会心の笑み。1990年の日本プロ(大阪・天野山)でプロ初優勝した加瀬が、20年後の2010年、日本プロシニアでシニア初優勝した。「僕のゴルフ人生が日本プロ優勝で始まった。シニアになってまたプロシニアで勝てた。「日本プロ」と自分のゴルフ人生とは切っても切れないのかな、と運命的なものを感じる」としみじみ話した。



(左より) PGA 松井会長、笠間東洋GC 村岡社長、加瀬、東洋プロパティ古宮会長



妻子夫人と息子の哲弘くんと一緒に

(PGA 公式ホームページから転載)